

伏見康治著作集

報 月
(6)
第7巻
1987・9

私の数学の先生だった伏見さん

安井琢磨

伏見さんと私との親密な関係は、二人が大学を卒業し、お互に大学助手としてそれぞれの研究に打ちこんでいった昭和初期に限られる。伏見さんの略年譜によって記憶を洗ってみると、それは伏見さんが東大から阪大へ移られるまでの昭和八年から九年までの一年の間のことであつたようだ。この一年間に、私は伏見さんから数学の手ほどきを受け、それが私の数学研究の基礎を形成したのである。私はこのことをすでに私の学問的自伝『近代経済学と私』（木鐸社、一九八〇年）の中に書き、また今年（一九八七年）四月

私の数学の先生だった伏見さん……安井琢磨……1
伏見さんと実験、そして原子力……武田栄一……3
「ロンドンの一ヵ月」補遺……亀瀬 進……5

号の『数学セミナー』の一文でも触れているが（伏見さん自身も「稲沼瑞穂さんの思い出」の中でこれに言及しておられることを最近知った）、重複をいわず整理しておく。

私は昭和六年に大学を卒業し、研究室に残って本格的に経済学の勉強をはじめたが、しばらくの学問的彷徨ののち、間もなくワルラスの一般均衡理論に研究の焦点を絞るようになった。一般均衡理論（これがいわゆる数理経済学の核心である）が学界の主流となる萌芽は、一九二〇年代の末期から英米の学界ですでに現われはじめていたが、マルクス経済学が盛行した昭和初期の日本の学界では、少数の先駆者を除いて殆ど顧みられることがなかった。経済学で数学を使うことが当時の日本では何よりも *anathema* だったのである。（半世紀後の今日の状況から見ると夢のような話だが、これは事実である。東大の経済学雑誌に論文を書いたとき、私は当時の経済学部長から数式をなるべく

使わないように、という注意を受けたことがある。）

旧制高校時代にはシェークスピアに熱中した文学青年の私だったから、ワルラスと取組むようになって慌てて数学の勉強をはじめた。高校の文科系のクラスにも数学概論の講義があつたけれども、こんなものは将来無用だという当時の通念に囚われて真面目に聴講していなかったことが裏目に出たのだ。私にどれだけの数学的才能があるかは疑問だったが、とにかくこんどは本気で真剣に数学を学ぶつもりになっていた。そこで二、三の日本語のテキストからはじめたが、どうもこれらのテキストだけでは説明が十分でないように思われた（当時高木貞治先生の『解析概論』はまだ出ていなかった）。私は（*je*）にあの部厚い *Coursat* の *Cours d'analyse mathématique* の第一巻から始めようと覚悟をきめた。この書のフランス語は易しく、説明は懇切丁寧ではあったものの、それでも初心者には呑みこみにくい箇所がところどころにあった。私は勇を鼓して面識のあった末綱一郎先生を研究室に訪ねて教えを乞うた。先生は私の質問に快く答えて下さったが、二、三回訪ねていくうちに幼稚な質問を面倒くさく思われたのか、「君には僕よりもっと適当な先生がいる」と言って物理学科助手の伏見さんを推薦（あるいは紹介）して下さった。これが伏見さんと私の出会いのはじまりである。伏見さんは私と同年代（年譜を見ると同じ一九〇九年の生れである）だったか

ら、末綱先生に対するような遠慮がなく初歩的な質問を臆面もなく述べたところ、いつも穏やかに明快な解答を与えてくれた。これがどれだけ大きな励ましとなったかわからない。私は伏見さんの親切に甘えて、伏見さんの一日の仕事が終わるだろうと想像される午後五時の前後に、週に一、二回（多いときには三回のこともあっただろう）研究室を訪ねたように思う。伏見さんはいやな顔もせずいつも快く私を遇してくれたが、会談が終わると本郷から西片町を通過して一緒に歩いて帰宅したことも多い。当時伏見さんは小石川林町に、私は原町に住んでいたからである。この途中で伏見さんが話してくれたことも私の数学勉強には有益だった。伏見さんが阪大へ移られる前のわずか一年足らずの期間ではあったけれども、私の解析学理解の基礎は伏見さんが与えてくれたといまでも感謝している。

伏見さんと私との直接の接触はこれで終りである。しかし阪大を通じての間接的関係はその後に残った。戦後——私は一九四四年に東北大に移っていた——それまで自然科学系の大学だった阪大に法文学部が設置されるようになったとき、私は当時の阪大大学長今村荒男氏の要請により併任教授として経済学科の創設に参画したが、年に三回ほど集中講義に行くだけだったから伏見さんにお目にかかる機会にはなかった。一九六五年、研究所設立の使命を帯びて私が専任教授として阪大に赴任したときには、伏見さんはすで

みすず書房
東京都文京区
本郷 3-17-15

にプラズマ研究所の所長として名大に移っておられた。私が阪大の社会経済研究所の所長であった頃に、名大の伏見さんから J. J. Thomson の *Recollections and Reflections*, 1936 を借覧した記憶がある。これが伏見さんとの直接交渉の最後だったように思う。

伏見さんからグルサーを教わって以来、すでに半世紀以上の歳月が流れた。若い気鋭の物理学者の姿から今日の円熟した参議院議員を予想することは不可能だったが、それぞれ異った学問の途を歩んだ過去を踏まえて、いつの日にかありし昔の懐旧談をする機会をもちたいものと願っている。

(東北大学名誉教授、大阪大学名誉教授)